夕焼け通信 1376号　2022.11.14
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）122

木幡智恵美

冬（3）

餅つきの日、まだ腹の痛みは治まらない。うつる病気だったらいけないので、一日中マスクをしたまま、寛大を迎え、餅つきを手伝わした。日にち薬か、翌日から徐々に痛みは少なくなり、休憩しながら何とか大掃除やお節の準備をすることができた。

そうして迎えた大晦日の午後、長男が帰って来た。新型コロナウイルスが日本に上陸する前の夏以来だから、約二年半ぶりだ。その間、神戸から小田原に転勤になり、さらに半年前から御殿場の事務所に移っている。幸い、御殿場事務所には、神戸で仲良くしていた先輩がいるうえ、上司にも恵まれ、すんなり馴染めたとのこと。可愛がってもらった義母の最期に立ち会えず、コロナ禍のため葬儀にも帰れなかったことをひどく口惜しがっていた。

夜は、二男の好物の照り焼きチキンと、長男極好きのキムチ鍋。食後は長男と二人、たまたまつけた紅白歌合戦に出てくる懐かしい顔ぶれに、思い出を重ねて語り合った。

新しい年が明けた。昼に娘一家がやってくることになっている。一年前の正月は、長男は帰省できず、ショートステイで療養中だった義母が一時帰宅をし、娘一家と共に昼を過ごした。かなりの積雪の中、難儀して車椅子の義母を送り迎えしたっけ。今年は雪が全くない。

午前中、長男が職場の人への土産に出雲そばを買いに行くというので付き合う。箱入りや袋入り、それぞれ何袋、何十袋と籠に入れていく。大袋五袋を車に積み込み、帰ってすぐに昼食の準備。いつものお節に加え、長男からのお節もある。コロナ禍で職員旅行が中止になった代わりにお節を配られるのだ。去年は和風だったから今年は洋風を頼んだところ、解凍が必要だったり、タレをかけたり、結構面倒だった。

昼前、娘たち一家五人がやってきた。宗矢が固まってしまって、私の膝から離れようとしない。それでも、食べ物はコンスタントに口に入れていた。そのうち長男に慣れ、帰るころには膝の上に乗っかるまでに。後日、娘が長男と宗矢のツーショットをプリントアウトすると、その写真を放さず、ついには破れてしまうほどだったという。

夜は長男と二人であれこれ話す。家を離れて十七年。その間、心配したことも多々あったけれど、今は芯のようなものが出来てきた気がする。仕事柄、命だけは大切にしてほしい。

がらがら橋日記

宮森健次

才の浦

隠岐の男性教師は、釣りをするかパチンコをするかだ、というのはよく知られている言い回しで、ぼくも隠岐にいたころは幾度となく聞いた。使われる状況次第で冗談にもなり、自嘲とか揶揄にもなる。釣りとパチンコそれぞれの特性は、逆ではなく近いところにあるような気がするから、どちらも嗜む人もいるだろうし、どちらもしない人ももちろんいる。おそらく真意は、隠岐で時間を忘れるほどの遊び上位二つということだと思う。

結果的にぼくもその言葉の範疇に収まってしまった。パチンコはしないので、というか隠岐に行く前に止めてしまったので、もっぱらしたのは、もう一方だ。指南してくれる人は身近なところに何人もいて、いろんな釣り場に連れて行ってもらった。釣り師天国と言われるだけあって、教えてもらったとおりに投げていれば、そこそこの釣果は得られた。そのうち一人でも行くようになった。釣れるかどうかよりも、あまり人がいなくて、のんびり過ごせそうなところばかりを選んだ。獲物を仕留めに行くより、一人になりに行っていた。磯やら波止やらに度々足を向けるのだから、隠岐に赴任した者の常道として端からは魚釣りにはまったように見えたかもしれないが、

「ねえ、ほんとうに魚釣りにはまってるの？」

と、問われることもあった。はまった人間のぎらつきをその人はぼくに感じなかったのだろう。見透かされていると思った。

打ち寄せる波に向かって釣り糸を垂れているといろいろなことが浮かんでくる。魚との駆け引きにわくわくも感じたが、陰鬱な思いもそれに増して打ち寄せてきた。「何しに来た」、そのころ読んでいた入沢康夫の詩の一節が、怒気を含んで谺した。なぜここにいるのか、妻と幼い子ども二人を連れて、ぼくは自分の居場所を見出せないでいた。

ついこの間、隠岐を離れてから一度もしていなかった釣りに誘われて、夕方から夜にかけて島根半島の才の浦に立った。風と波音が響く中にいると、すっかり忘れていた三十年近く前の自分に戻っていくようだった。心細さにひりついたままの自分に。でも、同時に数日前に隠岐からやってきたS夫妻の顔も浮かんできた。久しぶりに訪ねてきた二人と、一日松江の山歩きと食事を楽しんだのだった。おもしろい話もつらい話も変わらず明け透けなのがありがたかった。

若さゆえ、仕事も生活も振り返るだけの材料を持たず、ただもがくことしかできなかった自分をぼくは隠岐に置いたままにできたのかもしれない。才の浦の海は「何しに来た」とは言わなかった。

30代フリーター　やあ、ジイさん。１５０人以上が死亡したソウル・梨泰院の惨事は、ハロウィーンを楽しみに集まった若者たちを地獄に突き落とした。

年金生活者　近年これほど悲しみを誘われた事故はない。集まって楽しみたいという若者のピュアな欲望を利用して何ものかが仕組んだ惨劇、といったようなたとえ方をしてみたくなる。

　自分の若いときを振り返ると、何を目的とするでもなく、とにかく集まること自体が楽しみだったことを思い出す。コロナはその楽しみを封じた。それは人間の基本的な欲望を抑圧することを意味した。

　集まることの代わりをしたのがオンラインだった。だが、ウェブ世界はリアルではないぶん必ず不全感を残す。それが不快感を誘うことさえある。

　こうしてリアルな集まり、リアルな接触への欲望は耐えがたいまでに高まる。それが「集まり過ぎ」「接触し過ぎ」という事態につながった。若者たちは梨泰院の街の中でもより人が集まっているところ、より密になったところへと、なかば無意識のうちに引き寄せられていったのではないか。そう考えないと、なぜあの狭い坂道にあれだけ大勢の人数が密集してしまったのか理解しがたい。

30代　集まること、体を接触させることを封じられると、心に変調をきたす。文部科学省によると、２０２０年度に全国の国公私立小学校、中学校、高校から報告があった児童生徒の自殺は４１５人で、前年度より31％も増加し、調査を開始した１９７４年以降で最多だった。同省の担当者は「コロナ禍による家庭や学校の環境変化が複雑に絡み合い、子どもの心身に悪影響を与えていることがうかがえる」と語っている（２０２１年10月14日東京新聞ＷＥＢ版）

年金　「集まること」の代表的なものが祭りであり、いまよく使われる言葉を借りるなら「フェス」だ。それは一時的にせよ個人と集団が一体化した感覚を味わわせてくれる。この一体化の原型は母と子が一体化していた母胎の楽園に求めることができる。生誕によってその楽園を追われ、この世界の荒れ野で生きて行かなければならなくなった人間は、それまで楽園で浸っていた万能感と快感を奪われたと感じる。それを取り戻すことを無意識の願望として生涯にわたって持ち続ける。

　現実にはかなわないこの願望は代わりに性や恋愛を対象とするようになる。祭りもそうした代替の対象の一種であり、ハロウィーンはそのひとつということができる。

30代　同じハロウィーンでも東京・渋谷は混乱しなかった。

年金　日韓のコロナ対策の差が反映している。韓国では、スーパーや飲食店の営業時間の制限、大型イベントの人数制限、遊興施設の運営停止、マスクの着用がいずれも義務化され、違反者には過料が課せられた。つまり政府による要請にとどまらず、強制が国民に対してなされた。そのため、それが解かれたときの反動も大きかった。

　これに対し、日本では営業時間や人数の制限、マスクの着用はいずれも要請にとどまっている。にもかかわらず、国民はそれを進んで受け入れ、マスクに至っては政府が屋外での着用は不要と呼びかけても外さないでいる。強制のないぶん、その反動も少なく、渋谷では奪われた楽しみを一気に取り戻そうとして過剰に密集することもなかった。

30代　日本国民が強制なしに自らの行動を変えたのは、同調圧力が働いたのが一因とされている。

年金　韓国が強制に頼らざるを得なかったのは、日本ほど同調圧力が働かない社会であることを示している。

　同調圧力が働くのは、他人に迷惑をかけたくない、言い換えれば負い目を感じたくないという動機に根ざしている。何かをもらったらお返しをしないといけない、借りは返さないと気が済まない、といった心性だ。これをマスクに当てはめるなら、相手がマスクをしてコロナをうつさないようにする努力をしているのに、自分が何もしないのは相手に借りをつくることになるから、マスクをして借りを返さなければいけない、という心性ということになる。これは昔の氏族社会で支配的だった互酬制のメンタリティーにほかならない。

ニュース日記　854

中村　礼治

梨泰院で起きたこと

　柄谷行人は贈与と返礼からなる互酬を交換様式のひとつととらえ、交換様式Ａと名づけた。そしてＡに続いて、国家が強制する交換様式Ｂ（再分配）、自由な市場での交換様式Ｃ（商品交換）が成立すると考えた。Ａは国家が成立する以前の氏族社会で支配的だった交換様式であり、日本では縄文時代がその時期にあたる。

30代　交換様式Ａが支配的な社会が存在したのは日本だけではないだろう。

年金　池田信夫は縄文時代が１万年も続いたために、国家の成立後もその文化的な遺伝子が継承されて今に至っているという見方をしている（「統一教会騒動で家畜化する日本人」、10月15日アゴラチャンネル）。これは傾聴に値する。互酬制が支配的な社会では国家による強制的な再分配は不要であり、その時代のメンタリティーがいまなお維持されているとすれば、政府による強制がなくても、同調圧力によって行動制限、行動変容が生じ得る。そこでは強制は嫌われる。